

## 加崎 英男：山田先生の思い出

私をはじめ山田先生にお目にかかったのは、昭和12年東大理学部に入学的の折である。旧制中学の頃より山が好きで、判らないながら山の植物など集めていた私には、旧制高校では理学部を目指し、生物を扱う二類を志望し、幸い目的通り入ることができた。高校では幸い東大植物学科出身の福田兵五郎先生が指導教官を引き受けてくださったので、大学の植物学科の内容などを伺うことができた。旧制高校での級友は医者志望が多く、生物学科を目指したものはごく少数に過ぎなかった。しかし大学にはすばらしい仲間がいて、私など科学雑誌で有名な牧野富太郎先生くらいしか名前を存じ上げなかったのにくらべ、柴田桂太先生、三好学先生、早田文蔵先生など多くの方々のお名前や業績に詳しい人もおり、さらにはフランス語やラテン語の勉強をしている人もいて、流石に東大だと驚かざるを得なかった。生物学科の前半年のスケジュールの中で山田幸男先生の海藻学の講義と実習があった。この科目はもともと海藻学の泰斗岡村金太郎先生（水産講習所所長）がご担当であったが、岡村先生のご逝去後、山田先生に引き継がれた頃であった。山田先生のご講義は先生の東大定年にあたる年の昭和36年まで続いた。山田先生の臨海実習は、はじめての分類学実習に取り組む私どもにとって本来のオーソドックスの分類学を体験する上で極めて貴重なものとして印象に残っている。私もこの臨海実習の体験を通して分類学を顕花植物以外の材料でじっくり勉強してみたいという気になり、シャジクモの分類学を開始するようになった。私の材料は海藻でなく淡水藻に属するものであり、東京在住ということもあり、卒業研究は中井猛之進先生にご指導賜ったが、山田先生からも多くのご示唆やご意見を頂戴し、有り難く感謝している。

昭和12年の新入学生は7名であった。前年に入学し病気のためこの年に復学して我々と一緒になった1名（松江高校出身）の他、学習院出身が2名、二高出身が1名、松山高出身が1名、七高出身が1名、佐賀高出身の私で全部で7名であり、大体全国にまたがっていた。定員8名より1名少ない勘定になる。さてこの全員、3年次はそれぞれの志望によって専攻を決め、講座担当教授から研究題目をもらい卒業論文を作成することになっていた。我々の間では結局分類学志望が4名、生理化学が1名、生理学が2名となった。私は牧野先生の話の伺ってシャジクモをやることとなり、早速その

準備に取り組んだ。こうして同級の7名がそれぞれの道を選び、卒業論文課題に基づき仕事を進めた。

平成10年9月27日、同級の友人岡崎彰夫君が思いもかけぬ奇禍に遭い一命を失なった。岡崎君は大学卒業後水産庁に勤め技官として水産資料館担当の仕事がされていた。ここで時々図書の整理などがあり、私の娘も彼の令嬢の呼びかけで一緒にアルバイトに出かけたこともあり、ごく親しくさせてもらっていた。彼は祖父が軍人でその功績から男爵を賜っているという名門で、我々の仲間でも一目おかれていた。彼は真面目そのものの好男子で、卒業研究は北海道に出かけ、山田先生の直接のご指導のもと和歌山県のフロラ調査に邁進されていた。また小笠原諸島の海藻にも興味を持ち、何回も小笠原に出かけ採集に熱中されていた。彼のまとめた小笠原の資料は牧野標本館に貴重な記録として残っている。事故の当日はお嬢さん宅での夕食後、帰る途中交通事故に遭い意識回復のないまま帰らぬ人となった。あつという間に岡崎君の命を奪った車の暴挙に耐え難い憤りを感じるものであり、岡崎君のご冥福を祈ってやまない。その昔昭和34年11月3日阪大での藻類学会の会議の折、山田先生の直接のお弟子さんである瀬川宗吉先生が会議途中で倒れられたことがあり、この時の山田先生の苦悩にゆがんだお顔が思い起こされる。優しい先生にとって直接のお弟子さんの死はどんなにかお嘆きのことかと、別れの寂しさに思い至る次第である。「藻類」発刊の頃に、岡崎君が寒天工業について発表されているが、あのころの意気盛んな君が思い出されてならない。

さて私自身の研究であるが3年次の後半に牧野先生の講義があり、「シャジクモを研究するには、新しい材料に取り組む意欲をもて」との励ましのお言葉をいただいた。内外文献の紹介もしていただき、「日本での研究が低迷している、ぶつかっていけば必ず道は開かれる」という私にとっては誠に有り難い元気づけられるお言葉であった。事実世界の状況を改めて見ると日本またはアジアに知られている種類数はあまりにも少ない。そこで広く欧米の種類に触れる努力をしようと試みた。たくさんの外国産の種類に文献で当たり図をよく見て慣れる努力をした。こういった努力が実ったのか、その後芦ノ湖で新しい種類が見つかった。そしてその後は面白いように新しい材料が次々と見つかった。大型の新種の出現に際し、分類学研究室で命名

の議論も始まった。教室の名だたる大先輩の意見の交換と侃々諤々の議論の中、東洋での新しい発見にふさわしい名を考えるのは楽しかった。しばらくし

てホシツリモとシラタマモが誕生した。東洋ではじめての命名であり、はじめての属名となった。

(東京都世田谷区等々力7-22-4)

## 山田 家正：産学連携の視点から

日本藻類学会事務局から山田幸男先生ご生誕100年記念にあたっての原稿執筆の依頼を頂いた。泉下の先生も発展した学会の現状をさぞお慶びのことであろう。この企画を立案して下さった学会の御配慮に門下生の一人として厚く御礼を申し上げたい。私に対してのご依頼は非常に光栄ではあるものの、その応諾の答えを出すには少なからず逡巡した。それは、研究の現場や学会活動から長期間離れてしまっている今の私の立場では、その記事内容を学問的なこと、あるいは学会に関連することに置くのは困難であるからである。

日本藻類学会は1952年に設立されて初代会長が山田先生であったことから事務局は北大理学部植物分類が教室に置かれた。そのために、私もまだ大学院生であった1960年代初め頃から先輩の諸先生のご指導を頂きながら学会の仕事のお手伝いをした。それはそれなりに苦勞もあり思い出も多いが、むしろ、学会の仕組みや論文校正などを学ぶ得難い機会を与えて頂いたと思っている。その頃は学会設立時からすでに10年近く経過し、学会事務局の体制もある程度軌道にのっていた時期である。初期の藻類学会についての回想は、先輩の諸先生方をお願いするのが相応しい。私には、学会誌という科学の発展に寄与する紙面で改めて紹介するほどの材料は持ち合わせていない。そこで、視点を山田先生の大学人としての姿勢と、現在の大学の抱える課題の一つである社会における大学の役割についてを関連させて私の考えを述べることにしたい。

山田先生は藻類学という理学系基礎分野の大先輩であったが、基礎分野にとどまらず、産学連携の仕事をなさったと思っている。それもごく自然にである。

山田先生が戦前、戦後を通じて磯焼けの問題をはじめ、資源としての海藻の増養殖の問題などに直接、間接に関与されたことはよく知られている。先生は戦前から一貫して、水産科学領域の発展を考え、大学教員のみならず、水産研究所、水産試験場などで応用的、実践的な研究に従事する研究者達を世に送り出した。さ

らに、北海道文化財専門委員としてマリモの調査も担当され、その観光資源としての位置づけも踏まえておられた。また、内水面（淡水系）生物の資源管理にも委員として発言をされた。もちろん、卒業生の就職には人一倍配慮をされた先生にとって、水産関係は一つの就職先として考えておられたことも想像に難くないが、専門分野を通じて産業興隆に資するための視野は広がったと推察する。とりわけ有用海藻の産地の一つであった北海道においては、水産界と無縁であることは許されないことであったと思われる。先生が1960年に北海道新聞文化賞、1964年に北海道文化賞を受賞された背景には、学術上の功績に加え、このような地域社会の発展に貢献されたという幅広い諸活動も評価されていたことがあったと記憶している。

先生のこれらの幅広い活動は、先生の終生の恩師であった岡村金太郎先生が水産講習所（現在の東京水産大学）の教授、所長を務められたことと無関係ではなからう。さらには、1930年の北海道大学理学部の創設にあたって、当時東大の研究室におられた若き日の山田先生を植物分類学教室の教授として白羽の矢を立てた農学部の宮部金吾先生の影響も大きかったと想像する。よく知られるように、宮部先生は菌類学のみならずコンブ類の研究のパイオニアでもあった。余談になるが、この教授候補選考にあたっての経緯については、山田先生ご自身によって詳細に語られており興味深い（山田幸男著、「わが海藻研究五十年」、昭和54年刊）。それによれば、宮部先生が東大理学部を訪問して、当時副手であった山田先生に遠藤吉三郎先生の遺品である北海道産アイヌワカメ類の標本の説明をさせておいて、ひそかに人物評価をしていたことがわかる。札幌を菌類、藻類など隠花植物研究の中心地にしたという宮部先生の目は確かであった。山田先生亡き後、先生のご長男の山田真弓北大名誉教授のご好意で、先生が大切にしておられた蔵書のうちから遠藤先生のアイヌワカメ属のモノグラフを頂戴した。私に